

戦前戦中期日本を批判的に学ぶ小学校社会科歴史学習 —戦争とポピュリズムに焦点を当てて—

The Elementary School Social Studies Lessons that Critically Study
History of Prewar and Midwar in Japan
— Focusing on War and Populism —

小 田 泰 司

渡 邊 大 貴

Yasuji ODA

Hiroki WATANABE

福岡教育大学

大分大学

(令和6年9月30日受付, 令和6年12月23日受理)

I. 問題の所在

『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』の第6学年(2)ア(サ)では、戦前戦中期(昭和元(1925)年～昭和20(1945)年)を扱い、「戦後我が国は民主的な国家として出発し、国民生活が向上し、国際社会の中で重要な役割を果たしてきたことを理解できるようにする」ことが記されている(文部科学省, 2018, p.123)。

これを受けて東京書籍の小学校社会科教科書『新しい社会6歴史編』では、満州事変から日中戦争、太平洋戦争を経て原爆投下、終戦を扱い、一連の結果、日本国民が大きな被害を受けていたことを理解するようになっている(北他, 2020)。これらを通して、子どもたちは戦争の悲惨さに目を向け、世界平和や生命の大切さを考えるとともに、他国からの収奪によって国を豊かにしようとする政治や戦争への批判を行えるようになることがめざされる。だが、子どもたちは第6学年の内容(2)ア(コ)で、日清・日露戦争などによって戦争が国を富ませ、国際的地位を向上させる手段となったことを学ぶようになっている(文部科学省, 2018, pp.121-122)。歴史的展開から妥当ではあるが、戦争に勝つことは国を富ませ国際的地位を向上させるが、敗戦は悲惨な結果をもたらすので避けねばならないという矛盾を抱えている。

戦前戦中期を扱った、小学校社会科学学習の課題として角田将士・渡邊巧氏は、戦争の悲惨さへの共感的な理解に留まっている点を指摘している¹⁾(角田・渡邊, 2011; 角田, 2023)。同様の指摘は、川野哲也氏によってもなされている(川野, 2021)。これらの先行研究では、なぜ悲惨な生活を送らねばならなかったのか、なぜ戦争が起きたのか、どうすれば戦争を防ぐことができたのかを考える学習を構成する必要性が提起されていた。

これらの提案を踏まえて、国民が戦争に対して受動的立場に置かれた理由を幅広い視点から考えることが重要である。そして国民は戦争遂行を支持し、協力者であった事実を確認しなければならない。

小学校社会科において、国民はどのようにして政治に対して受動的立場に置かれるようになったのか、なぜ国民は戦争を批判することができなかったのかを考えることで、子どもたちが「かわいそう」という感情だけに留まらず、昭和初期の強圧的な政治、悲惨な戦争を学習できるようになることをめざす。

そのため本研究では、当時の為政者が行っていた情報操作「ポピュリズム」「プロパガンダ」を批判的に検討していく学習計画を立案する。ポピュリズムは、固定的な支持基盤を超え、幅広く国民に直接訴える政治スタイルであり、プロパガンダは、特定の思想・世論・意識・行動へ誘導する意図を持った行為である。詳細については後述するが、当時の日本政府や軍部は、新聞やラジオ、雑誌、映画など幅広いメディアを

使って国民に偏った情報を与えて戦争に反対意見を表明させず、むしろ協力するよう仕向けていた。政治による法律の制定、軍や警察による統制もあって国民も戦争を支持するようになっていった。

教材としては当時の新聞やラジオの記録を活用することが考えられるが、小学校段階の子どもたちには難しい。そのため、子どもたちでもわかる教材を検討した結果、落語に行きついた。戦前戦中期の日本では、国の政治への賛意や戦争への協力を促す目的で、「国策落語」が作られていた。落語はオチをもった噺で、噺口調で面白く、わかりやすく語られるため、小学校段階の子どもたちにとっても比較的に理解が容易である。

以上の問題意識により、「国策落語」を教材に戦前戦時中の情報操作を批判的に学んでいく小学校社会科歴史学習の授業づくりに取り組む。

Ⅱ. 教材研究

1. 民主主義とポピュリズム

水島治郎氏によれば、「ポピュリズム」には2つの定義がある。第1は「固定的な支持基盤を超え、幅広く国民に直接訴える政治スタイル」という定義、第2は「『人民』の立場から既成政治やエリートを批判する政治運動」という定義である（水島、2016, pp.6-7）。2016年のアメリカ大統領選挙以降、世界各地で注目を集めている「ポピュリズム」は後者であるが、日本ではこれまで前者を「ポピュリズム」という意味で使ってきた。例えば、2005年9月に、小泉純一郎氏が郵政民営化だけを掲げて大勝した第44回衆議院議員総選挙が象徴的である。筒井清忠氏はこのような現象を「大衆の人気に基づく政治」と捉え、それらは戦前期にも見られ、日米戦争の要因になったと主張する（筒井、2018, pp. i - iii）。例えば、明治以降に熱狂的に「ポピュリズム」が表れた事例が、日比谷焼き討ち事件であり、国連脱退であり、日中戦争であるという。ここまでを踏まえ、本研究では戦前戦中期日本の政治スタイルを「大衆の人気に基づく政治」＝「ポピュリズム」として捉える。

では、なぜこのような政治スタイルがとられたのだろうか。日比谷焼き討ち事件については、民本主義を唱えた吉野作造氏が「民衆が政治上に於いて一つの勢力として動くという傾向の流行するに至った初め」として捉えていた（松尾、2001, p.7）。この事件は、新聞社による日露戦争の講和条件の予想に煽られた大衆が各地の政治集会に参加する中で、政治に対する不満を持つようになり、警察署や交番、新聞社など各所への襲撃を行った事案であった。その後も1905年から1918年まで、電車賃の値上げや増税、米騒動などの生活負担増から、桂太郎首相退陣、シーメンス事件や普通選挙要求運動などの政治不満まで計9件が、東京市で市民の暴動が起きている。市民が実力行使をするようになったことで、支配者層は市民の動向を気にするようになっていった。特に満州事変以降は、満州国建国や中国との避けられない戦争に向かっていく中で、国民からの賛助を必要していた。支配者層であっても、民衆の運動への危機感から、民衆に働きかけて政策を是認させる必要があったのである。

2. 報国報道とプロパガンダ

「プロパガンダ」はラテン語で、日本語では「宣伝」と訳されている。田島奈都子氏は、『新社会学辞典』に依って、「宣伝」を「立場や見解の対立する問題に関して、言葉やその他のシンボルを駆使して個人あるいは集団の態度と意見に影響を与え、意図した方向に彼らの態度や意見を変化させ、さらには行動を誘うことを目的とした、慎重に計画された説得コミュニケーション活動」と説明し、宣伝が政治活動と結びつくことで政治宣伝（＝プロパガンダ）と呼ばれるとしている（田島、2016, pp.5-6）。国や軍部は、日比谷焼き討ち事件による国民の蜂起を記憶しており、国民を抑え込まねばならなかった。「国家総動員法」などの法律、スローガンをういた「国民精神総動員運動」などの国民動員によって日常的に国民を軍や警察の監視下に置く一方で、主要メディアであった新聞やラジオなどの統制によって、幅広く国民に都合よく改められた報国報道を受け取らせていった。終戦に向けて、国民は「非国民」と呼ばれることがないように戦争に協力するようになっていった。これらから、当時の社会・戦争を考える上で、ポピュリズムとプロパガンダは切り離すことができないと考える。

子どもたちは、戦前戦中期のポピュリズムとプロパガンダを学習することで、当時の戦争が支配者層の巧妙な情報操作と国民による熱狂的な支持に支えられたものであったこと、今日でも日本が民主的で平和な社会を守り抜くには情報の発信者による態度や意見の操作を疑い、立ち止まって真偽を確かめて、問題の解決

に向けて是々非々で臨むことを理解する必要がある。

3. ポピュリズムと文化・文芸

戦前戦中期日本の為政者による情報操作を用いたポピュリズムでは、政府に協力しようとする意思をもたせるために、これらを文化・文芸の作品に盛り込む手法が用いられた。例えば、映画や歌謡、講談や落語などで、国民の娯楽にも政府の関係者からの指導が入り、国威発揚を促していた。

落語に着目すると、戦争への協力が盛り込まれた「国策落語」がつくられていた。柏木新氏によれば「国策落語」とは、主に1930年代から40年代にかけてつくられた「あからさまに当時の国家の戦争遂行の意思を肯定し、国民に協力させる意図をもった落語」をさす（柏木、2020, p.4）。これらの落語は、満州事変勃発以降にいくつかが作られたが、日中戦争、太平洋戦争の激化に伴い、ラジオで流されたり、劇場で上演されたりするようになり、広く国民に戦争への協力を訴えかけるものとなっていった（柏木、2020, p.4）。具体的には、国民の生活に関わっては「軍人賛美」「戦時体制下の協力」「貯蓄や債券購入、献金の奨励」「耐乏生活」「食糧増産」「金属回収」「人口増への協力」「国民の体力向上」「防諜・スパイ防止」をテーマに、国の政策に関わっては「日本軍の賛美」「侵略戦争の正当化」「日独伊三国軍事同盟の歓迎」をテーマに、幅広く創作された。これらの落語では、悲しいことが続く困難な状況下で共感できないことや理解できないことを、噺でわかりやすく、面白さを交えて描くことで、国民に受け入れさせようとしていた。

Ⅲ. 単元「落語と戦争」の開発

以上を踏まえて、単元「戦争と落語」を開発した。ここでは、単元の目標、内容、方法を示す。

1. 単元目標

単元「落語と戦争」の目標は次の4点である。

- ・落語「御国の為」の変化をもとに、国民皆兵制度や国家総動員法などの社会体制のもとで国民の生活が制限されていたことといった、日中戦争開戦から戦中の社会状況を調べまとめる。
- ・国策落語の目的をもとに、戦前戦中期の日本では国民を戦争に動員する道具として落語などの娯楽が用いられていたこと（プロパガンダ）やこれらによって多くの国民の賛意や協力を得て政治が進められていたこと（ポピュリズム）を調べまとめる。
- ・戦前戦中期の日本におけるポピュリズムを手段としたプロパガンダの拡散について批判的に考え、為政者が流す情報をどのように受け取ればよかったのか、なぜそれができなかったのかについて自分の意見を表現することができる。
- ・戦前戦中期の日本における国や軍部の情報操作から、なぜ国民が戦争に協力したのかを主体的に追究しようとしている。

2. 内容

(1) 教材について

本研究で中核教材として取り上げる「御国の為」、「出征献金」、「出征祝い」の3つの「国策落語」をとりあげる。

「御国の為」は、当時の人気落語家であった柳家金語楼によって作られ、1933年に国民大衆雑誌『キング』の付録冊子に掲載された。その内容は次の通りである。ある店主（旦那）の息子（若旦那）に召集状が届き出征が決まった。旦那は、若旦那が徴兵に際して国のために尽くすことを周囲に公言して、かけ言葉で笑わせる。

「出征献金」は「御国の為」を金語楼自身が改作したもので、1939年に落語集『看板むすめ』に収録された。筋書きは、「御国の為」と同じであるが、国への献金に関する内容と若旦那を祝うために旦那がお店の人に好きな食べ物を言わせる場面が新たに追加された。具体的には、若旦那が陸海軍両省に一万円ずつ献金を行うことと、店の者が好きな食べ物としてテキヤカツを挙げることなどが追加された。

「出征祝い」は「出征献金」を改作したもので、1941年に『名作落語三人選』に、七代目林家正蔵の名で

収録された。筋書きは「出征献金」と同じであるが、献金に関する内容と若旦那を祝うために旦那がお店の人に好きな食べ物を言わせる場面に変更が加えられた。具体的には、店のもの全員の名で献金を行うこと、店の者が好きな食べ物としてテキヤカツを挙げるが、「贅沢はテキ」としてカツのみが肯定されることなどが変更された。

(2) 「国策落語」から捉えることができるもの

柏木氏は、国策落語を通じて捉えられるものとして次の2点を挙げている。第1は、「日本が戦争した時代の様相」（柏木、2020、p.4）である。先にあげた3つの落語の噺からは、当時の社会状況が読み取れるとともに、落語の変遷から戦況の激化という社会変化を捉えることができる。

第2は、「戦争にどうやって日本国民が総動員されていったのかのメカニズム」（柏木、2020、p.5）である。先にあげた3つの落語の噺からは、「日本人を様々な国家プロジェクトの積極的な参加者へと仕立て上げる」（クシュナー、2016、p.62）という日本の目標のもとで、落語といった娯楽が「娯楽の名の下に国家が団結できる公共空間を作り上げる」（クシュナー、2016、p.184）役割を果たしたことをとらえることができる。

3. 方法

単元計画を表1に、指導計画を表2に示す。単元構成の論理は次の通りである。

第一次は、社会状況を概観させる。まず、「落語『御国の為』は、どのような社会的背景をもって作られた落語なのか？」という問いをもとに、落語「御国の為」が作成された社会的背景について、落語の内容から考える。これを通じて、1930年代初頭の日本は中国と緊張関係にあって、国民は国民皆兵制度のもと兵士として徴発されることになっていたことを理解させる。次に、「なぜ、落語『御国の為』の一部を改作して落語『出征献金』に作り直したのだろうか？」という問いをもとに、日中戦争の開戦による社会状況の変化と、それに伴って生じた軍事費の不足を国民からの献金で補いたいという軍・政府の意図を理解させる。そして、「昭和8年から16年まで、噺が少しずつ変わっているが、社会はどのように変わっていったのか？」という問いをもとに、落語の変遷（「御国の為」→「出征献金」→「出征祝い」）を手掛かりに社会の変化について考えることを通じて、日中戦争の開戦と長期化の中で、軍・政府は国が一丸となる体制を整えていったことや、国民は日常生活が制限されていったことを理解させる。

第二次では、戦争動員へのプロパガンダとポピュリズムを認識させる。まず、「禁演となった落語もあるのに、なぜ3つの落語は、改作を続けながら演じられ続けたのだろうか？」の問いをもとに、落語が戦争の遂行に果たした役割について考えることで、落語をはじめ様々な娯楽が国民を戦争に動員する道具として用いられていたこと（プロパガンダ）を理解させる。次に、「なぜ政府は、きまりをつくるだけでなく、落語などの表現物を使って国民に情報を与えたのだろうか？」という問いをもとに、1930年から40年代の政治体制について政府・軍と国民の関係に着目して考えることを通じて、戦争への国民の協力が不可欠であったことや、プロパガンダによって国民の賛意や協力を得て政治が進められていたこと（ポピュリズム）、さらにはポピュリズムの構図では、情報を疑ったり、戦争を継続する政府・軍を批判したりすることができないことを理解させる。

第三次では、社会やそこに流れる情報を批判させる。ここでは、「現代の私たちは、戦前戦中のポピュリズムのように、国家から政策遂行に向けて協力を促すための情報発信（プロパガンダ）を疑わないといけないう状況になることはありうるのだろうか？」という問いをもとに、戦前戦中期の日本におけるプロパガンダを手段としたポピュリズムについて批判的に考え、為政者が流す情報との関わり方について、自分の意見を表現させる。

表1 単元計画

次	時	学習課題	本時目標
一. 社会状況の概観	1	落語「御国の為」は、どのような社会的背景をもって作られた落語なのか？	落語「御国の為」を手掛かりに作成された社会的背景について考えることを通じて、1930年代初頭の日本は中国と緊張関係にあって、国民は国民皆兵制度のもと兵士として徴発されることになっていたことを理解する。
	2	なぜ、落語「御国の為」の一部を改作して落語「出征献金」に作り直したのだろうか？	落語「御国の為」が改作された理由を考えることを通じて、日中戦争の開戦による社会状況の変化と、伴って生じた軍事費の不足を国民からの献金で補いたいという軍・政府の意図を理解する。
	3	昭和8年から16年まで、噺が少しずつ変わっているが、社会はどのように変わっていったのか？	落語の変遷（「御国の為」→「出征献金」→「出征祝い」）を手掛かりに社会の変化について考えることを通じて、日中戦争の開戦と長期化の中で、軍・政府は国が丸となる体制を整えていったことや、国民は日常生活が制限されていったことを理解する。
二. 戦争動員へのプロパガンダとポピュリズムの認識	4	禁演となった落語もあるのに、なぜ3つの落語は、改作を続けながら演じられ続けたのだろうか？	落語が戦争の遂行に果たした役割について考えることを通じて、落語をはじめ様々な娯楽が国民を戦争に動員する道具として用いられていたこと（プロパガンダ）を理解する。
	5	なぜ政府は、法律・制度をつくるだけでなく、落語などの表現物を使って国民に情報を与えたのだろうか？	1930年から40年代の政治体制について政府・軍と国民の關係に着目して考えることを通じて、戦争への国民（銃後）の協力が不可欠であったことや、プロパガンダによって国民の賛意や協力を得て政治が進められていたこと（ポピュリズム）を理解する。
三. 社会やそこに流れる情報への批判	6	現代の私たちは、戦前戦中のポピュリズムのように、国家から政策遂行に向けて協力を促すための情報発信（プロパガンダ）を疑わないといけな状況になることはありうるのだろうか？	戦前戦中期の日本におけるプロパガンダを手段としたポピュリズムについて批判的に考え、為政者が流す情報をどのように受け取ればよいのかについて自分の意見を表現する。

表2 単元「落語と戦争」指導計画

次	時	教師の発問	資料	児童の応答
一	1	落語について知っていることは何か？		・「まんじゅうこわい」や「寿限無」という落語を聞いたことがある。
		落語とはどのようなものか？	①	・落語とは、①滑稽で、②最後に「オチ」がつくことが特徴の噺である。江戸時代ごろからあり、大衆の芸能として親しまれてきた。落語は、主にその時代の社会や人々の生活を背景としており、欲望や願望を押し切り失敗する人間の業を笑い噺にしたもの。世の中の風刺や批判が込められた噺もある。
		落語を見てみよう。落語「寿限無」のオチはどのようなになっているか？	②	・名前があまりにも長いためにコブが引っ込んでしまった。その他にも知っている噺がある。
		昭和8年（1933年）に掲載された落語「御国の為」は、どのような内容の噺か？	③	・ある店主の息子に召集状が届き戦争に行くことになった。息子が徴兵に際して国のために尽くすことを周囲に公言して、かけ言葉で笑わせる噺。
		MQ：落語「御国の為」はどのような社会的背景をもって作られた落語なのか？		
		落語に出てくる「戦争」として、昭和の初めに日本はどこの国と戦争をしていたのか？		・中国と緊張関係にあり、戦争状態になった。（1931年 満州事変、1937年～日中戦争）

	<p>当時の人たちはどのように戦争に関わっていたのか？</p> <p>噺の中では、兵士として軍隊に徴発されることをどのようなものとして描かれているか？</p> <p>落語「御国の為」はどのような社会的背景をもって作られた落語といえるか？</p>		<ul style="list-style-type: none">・満 20 歳になったら徴兵検査を受けて合格すると兵士になる。当時は国民皆兵で 40 歳までは戦争に参加することになっていた。・家族が兵士に徴発されると、食事が普段の「めざし」から「好きな食べ物」に変わったり、徴発される本人が喜んでいたり、祝うべきこと、名誉なこととして表現されている。・当時の日本は中国と緊張関係にあり、戦争が始まれば、国民皆兵制度のもとで多くのものを戦地に送らねばならなかった。 落語の中では、兵士やその家族は、国のために兵士に徴発されることを名誉なこととして考えていた。
2	<p>昭和 14 年（1939 年）に掲載された落語「出征献金」は、どのような内容の噺か？</p> <p>2 つの落語を比べて、どのような点が異なっているのか？</p> <p>MQ：なぜ、落語「御国の為」の一部を改作して落語「出征献金」に作り直したのだろうか？</p> <p>この噺に描かれた当時の人たちはどのような暮らしをしていたのか？</p> <p>当時の日本軍の中国での戦況はどうなっていたか？</p> <p>噺にでてくる献金された 1 万円の価値は現在の価値でいくらなのか？</p> <p>なぜ、若旦那は、陸海軍両省に 1 万円も献金したのだろうか？落語「出征献金」がつくられた当時の日本はどのような状況だったのか？</p> <p>なぜ落語「御国の為」の一部を改作して落語「出征献金」に作り直したのだろうか？</p>	④	<ul style="list-style-type: none">・前回の「御国の為」とほとんど同じで、ある店主の息子に召集状が届き戦争に行くことになり、息子が徴兵に際して国のために尽くすことを周囲に公言して、かけ言葉で笑わせる噺であった。・オチが違う。食べていたものと若旦那の活躍にかけて「テキ（牛肉）にカツ（豚肉）」と言ってみたり、「支那（品）が悪い」、「生涯咳（中国側の指導者：蒋介石）」といった中国に関わるかけことばをオチにしたりしていた。また、店の旦那が徴兵を喜び、陸海軍に献金する部分が付け加えられている。・「ケチ」で食事などの生活を切り詰めないといけな生活をしていた。しかし、出征を祝う食事の材料は手に入るようである。・中国政府が本拠地を定めず、移動しながら日本軍に抵抗していたため降伏させられず、戦争を終結させられない状況が続いた。・昭和の初めの働く人の給与は 50 円程度なので、単純に今の価値でいえば 4000 ～ 5000 万円程度になる。両軍に計 1 億円程度の献金をしたことになる。・中国と戦争していた日本は、必要な物資を作るためにたくさんの軍事費を使っていたが、それでは足りず、国民に献金という形でお金の提供を募っていたため。・日中戦争の終わりが見えない中、国の軍事費が足りなくなり、家族を戦地に送る国民からの献金を頼りにしたいという状況を受けて、報国の方法をより明確にするために落語を「出征献金」に作り直した。
3	<p>さらに昭和 16（1941）年には、「出征献金」を改めた落語「出征祝い」が掲載された。落語「出征祝い」は「出征献金」と比べてどのような点が異なっているか？</p>	⑤	<ul style="list-style-type: none">・オチが違う。「出征祝い」では「テキ（牛肉）」が贅沢品になっていて、「贅沢はテキ」がオチになっている。また、お酒が「2 本買ってある」から「戦争に日本が勝つ」というかけ言葉がオチになっている。さらに、内容も、若旦那の出征を祝う父親の献金の噺から、店の者全員が若旦那の出征を祝って献金を行うものになっている。家族のみならず、献金者を拡大したい意図をもって作り直した。

		<p>MQ：昭和8年～16（1933～1941）年まで 漸が少しずつ変わっているが、社会はどのよう にな変わったのか？</p> <p>「御国の為」から「出征献金」（1933～1939 年）にかけて日本ではどのような出来事が起 きていたか。</p> <p>「出征献金」から「出征祝い」（1939～1941 年）にかけて日本ではどのような出来事が起 きていたか。</p> <p>1933～1941年にかけて、戦争を進めた結果、 日本の人々の暮らしはどのようなになったか？</p> <p>昭和8年～16（1933～1941）年まで、漸が 少しずつ変わっていたが、社会はどのように 変わっていったと考えられるか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日中戦争がはじまり、戦争での勝利に向けて国が一丸となる体制をつくるための法律（国家総動員法）が制定された。 ・国がモノの価格を決めたり、米が自由に買えず国が配る配給になったりした。 ・スローガン「欲しがりません、勝つまでは」のもと、国民は節約を求められた。 ・アメリカとも戦争が始まった。 ・たくさんの人たちが徴兵されて戦地に送られたり、工場に徴発されたり、日常生活に必要な物を生産できずに手に入れにくくなったりして、暮らしは悪くなった。 ・戦争が始まり、激しくなるにつれて、兵士や労働者がたくさん必要になったり、国民は物が手に入らず節約生活を求められるようになったりするなど、人も物も「足りない」状況が続くようになり、生産性が落ちた。
二	4	<p>3点の落語（「御国の為」・「出征献金」・「出征祝い」）で笑える？笑えない？</p> <p>落語は実際に当時の人々を楽しませるものになっていたのか？</p> <p>MQ：禁演となった落語もあるのに、なぜ3点の落語は、改作を続けながら演じられ続けたのだろうか？</p> <p>「出征献金」や「出征祝い」では、若旦那の周囲の人々が献金していたが、当時軍に献金する人はいたのだろうか？</p> <p>人々はどのような心情で献金を行っていたと想像するか？</p> <p>3点の落語はどのような役割を果たしたのか？</p> <p>献金や戦争賛美以外に、戦争への協力を促す落語にはどのような内容があったのか？</p>	<p>（笑える）かけ言葉を使って、上手くオチがつけられていて面白い。 （笑えない）落語はかけ言葉はあるが、漸が人々に戦争への協力を押し付けている感じがする。</p> <p>⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当時にも寄席には人々が集まっていたり、雑誌に落語が掲載されたりしていたことから、人々は落語を楽しんでいたと考えられる。ただし、戦争が激しくなる中で、「時局柄にふさわしくない」という理由から、禁演とされた漸もあった。 <p>⑦</p> <ul style="list-style-type: none"> ・献金する人はいた。献金によって飛行機や兵隊の備蓄品が購入されて戦地へ届けられていた。 <p>（例1）必ず戦争に勝ってほしいという気持ちをもっている人たちが協力した。 （例2）家族が戦地にいるので生きて帰ってこれるように献金で応援するしかない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦前戦中期の日本の目的は、「日本人を様々な国家プロジェクトの積極的な参加者へと仕立て上げる」ことであり、そのために落語といった娯楽を活用して「娯楽の名の下に国家が団結できる公共空間を作り上げること」であった。このような目的を反映してつくられた落語は、人々に献金を通じて戦争に協力するように促したり、戦争に徴発されて国を守るために戦うことが名誉なことと知らしめたりする役割を果たした。 <p>⑧</p> <ul style="list-style-type: none"> ・貯金の奨励や食料の増産、耐乏生活への順応、金属の回収、国民の体力増強などがあった。

	<p>国民に戦争に協力するように促す方法には、落語の他にどのような方法があったのか？</p> <p>禁演となった落語もあるのに、なぜ3点の落語は、改作を続けながら演じられ続けたのだろうか？</p>	⑨	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞、ラジオ、映画、歌謡、ポスターなど、身近な情報手段や娯楽が用いられた。このような方法で特定の考えや行動（この場合は戦争への協力）へ誘導するように仕向けることをプロパガンダという。 ・娯楽である落語を通じて、国民を戦争に協力するように仕向けるため。
5	<p>MQ：なぜ政府は法律や制度をつくるだけでなく、落語などの表現物を使って国民に情報を与えていたのだろうか？</p> <p>20世紀初めの日本では、国民は政治にどのように関わっていたか？</p> <p>なぜ政府は戦地で戦う兵士だけでなく、全国民に戦争への協力を促したのだろうか？</p> <p>当時の国民は戦争を支持していたのだろうか？</p> <p>国策落語をはじめとする表現物に疑問をもつ人はいなかったのだろうか？</p> <p>疑問をもつ人もいたのに、なぜ国民の多数が戦争を支持したのだろうか？</p> <p>なぜ政府は、法律や制度をつくるだけでなく、落語などの表現物を使って国民に情報を与えたのだろうか？</p>	⑩ ⑪ ⑫	<ul style="list-style-type: none"> ・明治～昭和にかけての日本では国民が政治に対する不満を暴動や要人の暗殺という行動によって示すことがあった。 暴動 日比谷焼き討ち事件（1905年） 大正政変（1913年） 米騒動（1918年） 要人暗殺 首相襲撃 原敬（1921年） 浜口雄幸（1931年） 五・一五事件 犬養毅（1932年） ・献金や徴兵に対する国民の協力がなく戦争を続けることができなかっただけでなく、国民が戦争に対する不満をもつことは、暴動や要人の暗殺という行動をとるようになれば国家の存亡にかかわる。そのため、政府や軍は、国民が政治に不満をもたないようにする必要があった。 ・当時国民の98%が戦争を支持していた。 ・疑問を呈する人はいた。例えば、作家宮本百合子は都新聞の記事の中で「ラジオなどできく落語が、近頃は妙なものになって教訓落語だが、話の筋は結局ききてである働く人々の生活や文化の低さを莫迦らしく漫画化したようなものが多くていい心持ちはしない。実質的にはちっとも健全と云えないのである」（柏木、2020、p.185）と述べていた。 ・政府や軍が整えた法律や制度により、国のすることに反対すると、警察などに取り締まられたり、コメなどの食料がもらえず生活ができなかったりすることが考えられる。 為政者が流した情報で国民から賛意や協力、行為を得て進める政治をポピュリズムという。 ・政府は国民に、見たり聞いたりわかりやすい方法で、受け入れやすいまたは受け入れざるを得ない情報を流して、国民が戦争に好意的に協力するように仕向けられていた。落語の表現は日常生活で用いる言葉や話し方を用いており、国民に伝わりやすく、受け入れられやすい。法律や制度は表現が難しく、罰則等もあり、国民にはなじみが薄く、受け入れにくい。

	<p>1930～40年代の政治は、政府・軍と国民の間で、どのような関係の中で行われていたのだろうか。（「政府・軍」「国民」「交戦国」の語句を使って、簡単に図に書いて説明させる。）</p>		<p>・政府・軍に管理された情報によって、国民が政府・軍に協力したり、交戦国に敵対意識を強めたりするようになる。こうしたポピュリズムの構図では、情報を疑ったり、戦争を継続する政府・軍を批判したりすることができない。</p>
三	<p>戦後、国策落語は上演されたのだろうか。なぜ上演されなくなったのだろうか。落語家たちは国策落語をつくり、上演したことをどう考えていたのだろうか。</p> <p>当時の国民は終戦後に戦争に協力したことをどう考えていたのだろうか。</p> <p>MQ：現代の私たちは、戦前のポピュリズムのように、国家から政策遂行に向けて協力を促すための情報発信（プロパガンダ）を疑わないといけな状況になることはありうるのだろうか。</p>	⑪	<p>・落語家は戦争が終わり協力する必要がなくなったため、上演されてなかった。国策落語は戦争遂行のためだけのもので、本来は聞いた人が楽しめるものではなかったのではないかな。戦後、落語家たちの演目集には国策落語が記載されていなかったもので、少なからず悔やんでいたのではないかな。</p> <p>・多くの人が亡くなったり、生活が破綻したりしたことを悔やみ、二度と戦争を起こしてはならぬと考えていた。</p> <p>・特別な意図をもった簡便な情報によって、他者の行動を誘発誘導しようとする人はいつの時代にもいるので、ポピュリズムもそのためのプロパガンダも現代社会でも起こりうる。現代では市民が政治に意見を言えなかったり、それによって不利益を被ることがあったりしてはならない。しかし意見を言うからには、社会に出回っている情報の真偽だけでなく、自分の考えやその根拠を疑って、事実や情報を広く集めて整理してからでなくてはならない。情報発信者の意図（なぜこのような情報を発信したのか）を考えることで、惑わされないようにしなくてはならない。（選挙公約による投票行動など）</p>

【資料】

①山本（2007）をもとに資料作成、②動画（NHK for School おはなしのくにクラシック 落語「じゅげむ」）、③「御国の為」、④「出征献金」、⑤「出征祝い」、⑥柏木（2010）をもとに資料作成、⑦⑧⑨⑩筒井（2018）をもとに資料作成、⑪⑫柏木（2020）をもとに資料作成。

Ⅳ. 成果と課題

本研究の成果は次の2点である。第1は、小学校社会科歴史学習で、戦前戦中期の日本におけるプロパガンダを用いたポピュリズムの浸透による戦争遂行を事例に、今日の私たちが自明で不変としている平和の維持・戦争の回避を批判する必要性を示した点である。第2は、戦前戦中期の悲惨な生活を「かわいそう」という感情で理解してきた、これまでの歴史学習を乗り越えるために、今日の児童にもわかりやすい口語で書

かれた落語を用いて、国民はどのようにして政治に対して受動的立場に置かれるようになったのか、なぜ国民は戦争を批判することができなかったのか、今日の私たちがどうすべきか、について考える単元「落語と戦争」を開発し、指導計画を示した点である。

残された課題は、開発した指導計画を実践し、その効果を検証するとともに、児童の姿から修正・改善を行うことである。

註

- 1) 角田・渡邊（2011）では、中等社会科の授業モデルも示されている。

主な参考文献

- 柏木新（2020）『国策落語はこうして作られ消えた』本の泉社。
- 柏木新（2010）『はなし家たちの戦争』本の泉社。
- 角田将士（2023）『学校で戦争を教える』学事出版。
- 角田将士・渡邊巧（2011）「社会科授業における『戦争と平和』へのアプローチ：単元『戦争とは何か』の開発を通して」『立命館平和研究』第12号，pp.27-38。
- 川野哲也（2021）「平和の大切さについて考える社会科授業」『山口学芸研究』第12号，pp.1-10。
- 北俊夫他（2020）『新しい社会6 歴史編』東京書籍。
- クシュナー・バラク（著），井形彬（訳）（2016）『思想戦：大日本帝国のプロパガンダ』明石書店。
- 田島奈都子（編著）（2016）『プロパガンダ・ポスターにみる日本の戦争：135枚が映し出す真実』勉誠出版。
- 筒井清忠（2018）『戦前日本のポピュリズム：日米戦争への道』中公新書。
- 萩野富士夫（2014）『「戦意」の推移：国民の戦争支持・協力』校倉書房。
- 松尾尊兌（2001）『大正デモクラシー』岩波書店。
- 水島治郎（2016）『ポピュリズムとは何か：民主主義の敵か，改革の希望か』中公新書。
- 森分孝治（編著）（2006）『“戦争と平和”をめぐる論点・争点と授業づくり』明治図書。
- 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編』東洋館出版社。
- 山本進（編）（2007）『落語ハンドブック第3版』三省堂。